

# 我が国における近代語としてのスポーツの概念形成 Concept formation of sport as a modern language in Japan

1K07B109-2  
指導教員 主査 友添秀則先生

下山 竜良  
副査 寒川恒夫先生

## 【問題の所在】

「スポーツ」という用語が我が国の国語辞典に採録されるのは1932年に出版された『大言海』においてである。しかし一方で、“sport”用語は1814年に出版される英和辞典『語厄利亜語林大成』を皮切りに採録され続けてきた。何故に、“sport”用語が明治期以前から日本に紹介されていたにもかかわらず、国語として「スポーツ」を採録するには世紀を跨ぐほどの歳月がかかったのか。

外国語の“sport”を、我が国語の「スポーツ」に置換するという事は、“sport”を日本的に再編・改変しなければならないと考えられる。その翻訳的な作業においてどのようなイデオロギーが機能していたのかについて考察しなければならない。

## 【研究目的】

本研究は、今日理解されている「スポーツ」がどのような経緯で概念形成されたかについて明らかにすることを目的としている。明治元年（1868年）から太平洋戦争が終わるまで（1945年）の近代という時代に成立した言語観によって、“sport”用語はどのように加工・改変され、我が国語としての「スポーツ」に成り得たのか。

このことを明らかにするために、帝国主義的な国家意識に支えられたときの教育とスポーツの関係構造に着目しながら、当時の「スポーツ」の概念形成についての論証を試みていく。

## 【本研究の意義と限界】

本研究は、第二次世界大戦前における「スポーツ」の概念形成について論考している。それは、1932年に出版される国語辞典『大言海』で「スポーツ」用語が初めて採録された時の“sport”の日本的解釈と、我が国語としての「スポーツ」への意味の形成について考えるということである。つまり、第二次世界大戦後の民主的人間形成を意味するようになった「スポーツ」以前の「スポーツ」の概念形成について論じている。

このことは、日清・日露戦争後の「スポーツ」

が娯楽的ニュアンスを排除し、競技的ニュアンスを濃厚に保持するようになったときの概念的変質を明らかにできるという点で意義があると言える。しかし、学校体育の範囲を中心にして「スポーツ」の概念が形成されたという限定性が、その概念自体を縮小してしまうというところに本研究の限界がある。

## 【本研究の考察】

第一章では、近代語を定義した後、スポーツ（sport）の概念研究を検討しながら、辞書的意味の変遷について確認していく。この考察から、我が国語としての「スポーツ」は、昭和期にならなければ成立しないという特殊な事情があったことを示唆する。

第二章では、近代語が日清戦争後の帝国主義的イデオロギーの影響を受け、言語とナショナリズムが不可分に結び付き始めた時の“sport”の日本的解釈について考察していく。

そして、第三章では、帝国主義的な国家意識を背景にした学校体育の範囲で、「スポーツ」の意味が形成され、外国語であった“sport”の翻訳的機能を果たしたことについて言及する。

これらの考察によって、帝国主義化する我が国の体育の範囲で、外国語である“sport”との概念的相違を超越し得る精神的風土が形成されたことを明らかにでき、それによって我が国語としての「スポーツ」が誕生したことを論証できる。

## 【今後の課題】

本研究は帝国主義化する我が国の体育の範囲において「スポーツ」が概念形成されたと述べた。しかし、帝国主義化とは、国内に留まる現象ではなく、支配国である我が国が植民地にした被支配国との関係構造の中で理解されるものである。ゆえに、植民地下にあった朝鮮や台湾との関係構造の中で体育の思想を再考していく必要があると言える。そのことについては、今後の検討課題としたい。